

Toyota City Museum
Of
Local History

豊田市 郷土資料館だより

No.112

目次

豊田市郷土資料館特別展	2
『新修豊田市史』通史編刊行記念 はじめてのとよた史 を開催します	
『新修豊田市史』通史編刊行！ 「市史」から見える地域の姿	4
遺跡の発掘調査報告書制作中	5
民具調査だより-33 ハクキンカイロ	6
子どもたちにわくわくドキドキを！ コロナ禍でも学びを止めないリモート学習	7
[寄稿] 76年前の工場疎開跡を探して	8
みんなでつくる博物館！ ～自然標本あつめるプロジェクト～	10
とよたの新しい博物館 「はくぶつchan」配信中	12

ISSN 0919-0120
202112 No.112

豊田市郷土資料館特別展

『新修豊田市史』通史編刊行記念

はじめての とよた史



空から見た豊田市

『新修豊田市史』通史編刊行記念 はじめてのとよた史 を開催します

はじめに

平成17年(2005)の市町村合併の翌年から開始された新修豊田市史編さん事業は、これまで概要版・資料編12巻・別編6巻を刊行し、令和元～2年(2019～20)度には通史編全5巻を刊行しました。同事業は、昭和48～62年(1973～87)に編さんされた『豊田市史』全12巻の成果及び旧町村で編さんされた町村史の成果を踏まえ、とよたの新しい歴史像を提示するものです。

本展では、新修豊田市史編さんの過程で明らかになった事柄を踏まえ、この地域を特徴づけている「山間部と平野部のコントラスト」「人・モノの交流のダイナミズム」「多様な土地利用と産業の展開」を視点として、市域の自然と歴史を取り上げます。

幅広い領域・時代を取り扱う本展ですが、本稿では、展示の一部を構成する江戸時代を例に、展示を準備する中での所感を述べたいと思います。

地域の歴史と全国の歴史—「部分と全体」の視点

私的なことで恐縮ですが、私は群馬に生まれ、学生時代は関西で、職を得てからは関西と東京で過ごし、2年前に縁あって豊田市に就職し、その後、結婚し、今では親となりました。

着任当初、私はこんなことに悩んでいました。「地域の歴史に関する知識が不足し、土地勘や、この地域の歴史に対する実感—「肌感覚」とでもいうべきかも、もともと住んでいる人々に比べて形成できていない」。

これは、私にとってここが出身地ではないゆえに当然のことではあるのですが、この地域の歴史を扱うことにどこか引け目を感じていたのも事実です。「よそ者がとよたの歴史を語れるのか？」そんな根本的な問いであったともいえます。

こんな煩悶はんもんはおくびにも出さず、郷土資料館の特別展「猿投山」「渡邊半蔵家」、近代の産業とくらし発見館の企画展に携わってささやかな知識と経験を得る中で、このような考えが浮かびました。「特定の地域の、特定の歴史的事象の追求に注力することは大事である。しかし、それが特異な事象か、普遍的な事柄なのかを常に考えるために、全国的な視野から地域史を考えるべきで、単に地域の現象の提示や誘示にとどまってはならない」。

もっとも、例えば福岡県の板付遺跡等、農耕遺跡に関する考古学の成果に顕著なように、ある地域に関する

特定の研究が、全国の文化の発展を考えるために大きな意義を持つこともあります。

これらを総合すると、「郷土史」の言葉もあるように、愛着や愛情をもって地域の歴史的事象(部分)に触れること。とよたをフィールドにして、その歴史と文化に深く入り込むこと。それとともに、全国的・東アジアを含む世界的な視野(全体)に立って、地域の歴史的事象がどのように位置づけられるのか。この「部分と全体」を見られるバランス感覚が、地域の歴史を考える有効な姿勢といえましょう。

江戸時代の日本社会を考える際の基本的経済指標

以上からすると、豊田市域における江戸時代の歴史的事象を考える際には、江戸時代の日本社会がどのような状況であったのかを検討することに意義がありそうです。江戸時代の社会経済状況についていえば、これまで全国的な経済指標の推計が種々行われてきました。

下の表は、約270年間にわたる江戸時代における、日本の人口・耕地面積・実収石高の推移を示したものです。人口は、17世紀初めに約1,200万人であったものが18世紀初めには約2,700万～3,000万人と飛躍的に増加したものの、18世紀には停滞し、19世紀に再び増加に転じ、幕末には約3,200万人となりました。

耕地面積は、17世紀初めには約200万町、18世紀初めには約290万町に増大し、18世紀は微増にとどまっています。19世紀に再び増加し、19世紀半ばには約320万町となりました。

実収石高は、17世紀初めは約2,000万石で、18世紀初めには約3,000万石まで増加しました。18世紀においても着実に増加し、19世紀初めには約3,800万石、幕末には約4,200万石となりました。

人口及び耕地面積の推移は、「成長・開発の17世紀」

表：1600～1872年日本の人口・耕地・実収石高

時期(年)	人口(万人)	耕地(千町)	実収石高(千石)
1600	1,200	2,065	19,731
1650	1,718	2,354	23,133
1700	2,769	2,841	30,630
1720	3,128	2,927	32,034
1730	3,208	2,971	32,736
1750	3,110	2,991	34,140
1800	3,065	3,032	37,650
1850	3,228	3,170	41,160
1872	3,311	3,234	46,812

(出所) 速水融・宮本又郎編『日本経済史1』(岩波書店、1989年)、44頁。

「成長の限界と停滞の18世紀」「再成長の19世紀」というイメージが提示できます。

一方、人口及び耕地面積の増大が停滞した18世紀においても実収石高が増加したことは、金肥の投入等による土地生産性の上昇のみならず、耕うん等、家畜が行っていた労働を人間が行う労働集約型の農業が展開されたこと等（いわゆる「勤勉革命」の存在）を示唆しています。

全国的な趨勢と市域の事象の特異性

以上の全国的な趨勢は、市域でもおおむね軌を一にしていたものと考えられます。

例えば、17世紀の成長の帰結として考えるべきなのが、後にトヨタ自動車が進出した「論地ヶ原」における17世紀末から18世紀初頭における入会権をめぐる山境争論です。背景には開発の進展と自然資源の枯渇化があったのです。

一方、全国的にみて特徴的な事象が市域にはあり、これが後々の豊田市を特徴づけていく要素になったとも考えられます。

例えば、18～19世紀の足助地区や旭地区で行われた漆の生産は、越前国（福井県）からやってきた漆掻き職人によって支えられており、彼らに資金提供していたのが足助の富商・紙屋鈴木家でした。

稲武の素封家・古橋家は、18世紀初頭に中津川から稲橋村（稲武町）に移住してきたといわれています。19世紀半ばに足助・香積寺の住職として招かれたのが、大坂で活躍していた禅僧の風外本高でした。やや時代が下がるものの、19世紀末に枝下用水の開発に尽力したのは、近江国（滋賀県）出身で、麻布の持ち下り商いを行ういわゆる近江商人であった西澤真蔵でした。

これらの例は、外からやってきた人々が活躍できる素地もしくは風土がこの地域にあったこと、臆さぬ進取の気風があったことを示していると考えられます。そしてこれらは、1930年代以降のこの地域における急速な重化学工業化に依拠した発展をもたらした要因ともいえそうです。

おわりに

ある事象について、一旦選択された状態がなぜ維持されているかについては、補完性や外部性などの経済理論によってある程度説明できます。しかし、なぜその状態に到達したかについては、歴史的事象を見なくては説明できません。

「最終的な結果が時間的に離れた出来事から重要な影響を受ける」という現象のことを経路依存性（path

dependence）といい、経路依存性は、歴史研究の意味に理論的根拠を与えています。パソコンのキーボードの文字配列が、タイプライターのそれ（入力のしやすさよりも、タイプライターの部品の耐久性が配列の基底となったという）に影響を受けていることは、経路依存性の例としてしばしば用いられます。

本展は、豊田市域における経路依存性を考える取組ともいえます。そして、新型コロナウイルス感染症に伴う大きな社会変化を、今まさに経験している我々が、直近の記憶とともに、未来の豊田市民に歴史的事象を確実に手渡すことや、未来を生きる彼らが経路依存性を考える際の材料を提供することを企図しています。

いささかややこしい話になりましたが、ややこしいついでに、最後にひとつ私見を述べさせていただきます。

歴史的事象を含む、人間や自然の営みを考えていると、全てのものが移り変わっていくことが明確にわかってきます。まさに「諸行無常」。あらゆる物事にとって、変わらないことは不可能です。

一方で、全てのものは関係性を持って存在しています。「縁起」といっても良いでしょう。あるものが変われば、その周辺の世界も変わります。逆に、周辺の世界が変われば、あるものも当然変わっていきます。

これらをあわせると、諸行無常の一環として自分で選択した変化、と捉えられる事柄であっても、実は縁起に従ったものであった、と考えることもできます。

「よそ者」である私が豊田市にきたことについて、先に「縁あって」と表現しました。外の地域からこの地域にやってきて活躍した先人の足跡を見るとき、よそ者たる私は、より一層の貢献を誓うとともに、この地域における縁起の多様性や、縁起を感じる機会の多さについて、更に思考して本展を準備しています。

（倉林重幸）

会期	令和4年1月22日（土）～3月20日（日） 月曜休館（ただし、祝日は開館）
開館時間	午前9時～午後5時 （入館は午後4時30分まで）
会場	豊田市郷土資料館 第1展示室・第2展示室
観覧料	一般 300円 高校生・大学生 200円 ※中学生以下、70歳以上、豊田市在住・在学 の高校生、障がいのある方及びその介護者 1名は無料（要証明書等提示）

関連イベント

ギャラリートーク（学芸員による展示解説）

日時 令和4年1月22日（土）、3月19日（土）
各午後2時～2時30分

※新型コロナウイルス感染症の感染状況により、変更となる場合があります。詳細は郷土資料館ホームページをご覧ください。




『新修豊田市史』
通史編刊行!

「市史」から見える地域の姿



『新修豊田市史』通史編5冊は、原始から現代まで時代ごとにまとめられた歴史を知ることができる読み物です。カラー写真を多く使い、小見出しごとに2ページ程度の文章で紹介されているので読みやすくなっています。目次から気になる項目を拾い読みしても良いですし、「コラム」を読むだけでも、知らなかった歴史が満載です。今回は、通史編から「誰かに話したくなる地域の歴史トピック」を紹介します。

縄文人の赤いクシ

高橋地区の寺部遺跡から、漆が塗られた木製のクシの一部が出土しています。クシ歯を縛って漆で固めた

 縦クシで、あざやかな赤色が確認できます。縄文時代の人がこのクシを髪に挿していたと想像すると実におしゃれだと思えます。しかし縄文人は単におしゃれのために赤いクシを使っていたのではないようです。クシには何らかの力が宿ると信じられていたようですが、赤色にも悪いものから身をまもる魔除けの意味があり、古代の人は顔を赤く塗る化粧をしていたとか。「赤」には特別な意味があるようです。

『通史編 原始』より

豊田市域でも行われた太閤検地

「太閤検地」について、学校の歴史の授業で聞いたことがあると思います。豊臣秀吉が行った土地の面積・生産高の検査ですが、豊田市域でも行われていました。検地帳には土地の場所・小字ごとに、石盛（上中下などの生産力）、面積、年貢負担者・名請人が記載されています。天正18年（1590）の足助地区の四ツ松村検地帳（写）をみると、430年前にそこを所有していた人の名前や生産高がわかります。市内では他に川手村、八草村、築平村などの検地帳11冊（写し含む）が伝わっています。

『通史編 古代・中世』より

いっ 拳母城下に市がたつ

江戸時代、拳母藩の領主が内藤家となると築城が進められ拳母城を中心に城下町が整備されました。現在の豊田市駅前周辺にあった城下町の人々の様子はどうだったのでしょうか。『通史編 近世』には各月の5・15・25日に本町で、10・20・30日に中町で市が開催されていたことが紹介されています。

市では「市掛かり」が、商人（資料では瀬戸物商人）に対して市の決まりを守るよう示し、「市世話方」が「喧

嘩口論」「酒狂人」への対応、持ち逃げ、食い逃げ等のトラブルが発生しないように見回りをしています。

竹生町では、定期市とは別に馬市（写真「馬市の図」牧野敏太郎画）が開催されていました。慶応4年（1868）には4月5日からの3日間で217匹の馬が出品されていたそうです。



また、市では「物真似」や「浄瑠璃」の興行も行われていたので、相当な賑わいであったことでしょう。

『通史編 近世』より

拳母町に町有飛行機「拳母号」があった！



この写真は、昭和13年（1938）の「拳母町勢要覽」の表紙です。ここに描かれている飛行機が「拳母号」。この町有飛行機は企業だけでなく多くの個人からの献金で購入されました。現在の元町あたりには「衣ヶ原飛行場」もありました。民間の飛行場で昭和6年（1931）に地鎮祭が行われ、昭和11年（1936）には完成していました。全国的にもめずらしい町有飛行機「拳母号」は小学校の見学会や体験飛行で活躍しましたが、次第に、戦争へと向かう時代の波にのみ込まれていきます。

『通史編 近代』より

今回紹介した内容は、歴史のひとコマにすぎません。市域の歴史を横断的に見た時にはまた別の歴史が見えてきます。文化財から見える歴史もあります。市史編さん事業は、令和5年（2023）6月に最後の1冊『総集編』を刊行します。『総集編』は各巻の内容等から項目を選んで紹介する事典形式の本です。「市史」を手にとっていただくことで市域の歴史への興味と理解につながることを願っています。（伊藤智子）

いっ
郷土

『新修豊田市史』通史編は各4,000円。
市郷土資料館、市史編さん室、中央図書館ほか、市内一部書店で販売中。
詳しくは「豊田市郷土資料館 市史編さん室」HPへ

遺跡の発掘調査報告書制作中

文化財課では毎年、発掘調査を行った遺跡の報告書を刊行しています。今年度は、しおはざま ころもく塩狭間古窯群の発掘調査報告書を制作中です。

塩狭間古窯群とは

塩狭間古窯群は足助地区の細田町に所在する3基の窯跡のことで、昭和43年(1968)から44年にかけて、旧足助町によって調査が行われました。窯は長さ約9m・幅約2m前後で、山の斜面に沿ってトンネル状に掘られていました。操業時期は平安時代終わり頃から鎌倉時代初め(12世紀後半から13世紀初め)であったと考えられています。



調査後の窯跡

出てきたものは

窯跡からは山茶碗や壺、瓦等が見つかりました。山茶碗とは中世に庶民が日常的に使っていた碗や皿です。壺には肩の部分に蓮の花びらをイメージした「蓮弁文」が描かれているものがあります。この「蓮弁文」は、豊橋市南西部から渥美半島にかけて製作されていた「渥美窯」の製品と共通しています。瓦は屋根の軒に据える軒平瓦や軒丸瓦、屋根に敷き詰める平瓦と丸瓦が見つかりました。

軒平瓦と軒丸瓦の先端には文様があり、軒平瓦には唐草文、軒丸瓦には三巴文と周囲に2個1セットのしゆもん珠文が9組描かれています。これらの瓦は足助八幡宮の発掘調査でも見つかり、両者は深い関係にあったと考えられます。



蓮弁文が描かれている壺



軒丸瓦の文様

塩狭間古窯群の重要性

塩狭間古窯群で作られた山茶碗は、瀬戸市付近で作られた山茶碗と特徴が似ており、壺の文様も渥美半島の影響が考えられます。また瓦も、文様が同じものが新城市でも見つかり、このように、塩狭間古窯群は中世の足助地区と渥美半島、東三河・尾張山間部を繋ぐネットワークを考える上でも非常に重要な遺跡と言えます。

発掘調査報告書は今年度末に刊行する予定です。刊行した報告書は図書館に配架されるほか、郷土資料館でも販売します。

(永田悠記)

使い捨てではないカイロ

ハクキンカイロ



寒さが身にしみる季節がやってきましたが、私たちが防寒用品として過去にどのようなものを使ってきたかを振り返ってみますと、古くは自然にあるこぶし大の丸石(滑石・蠟石・蛇紋岩などが良いとされる)をかっせき ろうせき じゃもんがんの丸石(滑石・蠟石・蛇紋岩などが良いとされる)をいろりの丸石(滑石・蠟石・蛇紋岩などが良いとされる)をふところの丸石(滑石・蠟石・蛇紋岩などが良いとされる)をおんじやくの丸石(滑石・蠟石・蛇紋岩などが良いとされる)をあな うがの丸石(滑石・蠟石・蛇紋岩などが良いとされる)をかいろばいの丸石(滑石・蠟石・蛇紋岩などが良いとされる)をなすの丸石(滑石・蠟石・蛇紋岩などが良いとされる)を通過孔の開いた金属容器に入れ燃焼させる懐炉が現れます。



州紀御免

【懐中暖炉】 W125 H80 D35

『よみがえれ! シーボルトの日本博物館』(株式会社青幻舎発行)の図録に上掲写真とよく似たものがあり、その解説文には「医療用懐炉/江戸時代、上部に通気孔を開けた金属製の容器で、アレクサンダー※目録には“熱い砂を入れ、胃の周辺を温めるために用いる金属の小箱”とある。解説のように加熱した砂状のものをいれるか、もしくは粉末状の懐炉灰を燃焼させて用いたものとみられる。身体に馴染むよう緩やかなカーブのある形態である。」とあります。※アレクサンダーはシーボルトの長男で、父シーボルトが作成した展示目録に基づき、慶應3年(1867)に目録を作成。

明治から大正にかけては、懐炉灰を棒状の紙で包んだものを容器に納めて使用することで着火を容易にした“灰式懐炉”が普及しました。この灰式懐炉は後述の白金触媒式懐炉が登場するまで、小型の物は「懐炉」、大型のものは「寝炉」と呼ばれ重宝されました。



【灰式懐炉】 W118 H27 D65



【灰式懐炉】 W125 H26 D59

■ ハクキンカイロ登場

大正末期、「プラチナ(白金)の触媒作用を利用し、酸化したベンジンをゆっくり酸化発熱させる」懐炉がまとば にいちの場仁市によって発明されました。使い切り、使い捨てではなく何度でも使用できるカイロの発明でした。



【白金懐爐】 W69 H97 D14



元賣發 會商登満矢

キハツ油の瓦斯が火口のプラチナ綿に觸れて科學的發熱し連續晝夜六十度(°)内外の保温を致します。火をつけるのはマッチにても点きませんが炭火が一番よろしいガスロソクのは絶対いけません。火口は毎日使つて三四ヶ月間位は十分保ちます。火口にキハツ油をかけた様火口を吹かぬ様願ひます。悪いキハツ油は火つき悪く温度も低いで赤貝印程度の油が一番よろしい油を入れ過ぬ様願ひます。使用方法は必ず説明書をお読みの上其通りにお使い下さい間違つた使ひ方は懐爐をこわします。

大正12年(1923)の創業当時は「矢満登商會」で、「ハクキンカイロ株式会社」名になるのは昭和38年(1963)、さらに昭和63年(1988)に「株式会社ハクキン」へと社名が変更がされました。

(東海民具学会 岡本大三郎)

子どもたちにわくわくドキドキを!

コロナ禍でも学びを止めないリモート学習

コロナ禍の新たな取組

豊田市教育研究協議会社会部会ならびに豊田市教育自主研究グループ（社会科）の先生方と連携した企画展が、7月6日（火）から9月26日（日）まで開催されました。

縄文時代の生活から、私たちが豊かな生活と環境とのバランスを考えながら生きていくための目標 SDGs の種を探してもらった展示です。7月14日（水）に朝日丘中学校、16日（金）に若林西小学校と郷土資料館をリモートでつなぎ、展示室から「問い」を発信して子どもたちが課題を追究する授業を実施しました。以下、朝日丘中学校との連携授業の様子をご紹介します。

企画展「縄文ライフ！～SDGsの種を探しに～」と朝日丘中学校とのリモート学習

● 双方向で行うリモート学習

展示室から「縄文土器が地域によって違うことから、どのようなことがいえるか？」という問いを発信しました。子どもたちが課題を追究するために、展示室内の様子をリアルタイムで届けました。子どもたちは、個々の学習タブレットに映し出された展示室の土器の量に圧倒されたり、大きさ、形、文様が異なる点に着



熱心に課題を追究する生徒

目したりしました。その後、一つひとつの土器に関心を寄せながら、「〇〇の土器を映してください」と話し、意欲的に課題に迫りました。

生徒 A の感想

17 パートナースHIPで目標を達成しよう

17 パートナースHIPで目標を達成しよう

1つの土器に地元と他の地域の文様が描かれていることに驚きました。SDGsの17「パートナーシップで目標を達成しよう」につながると感じました。

また、展示室から「縄文人はどのような石を矢じりに使っていたのか？」という問いを発信しました。子どもたちは、展示より丸根遺跡（豊田市野見町）から発掘された矢じりの石のほとんどが豊田の石ではないことを読み取り、課題に迫りました。

生徒 B の感想

9 産業と技術革新の基盤をつくろう

9 産業と技術革新の基盤をつくろう

縄文人は豊かな生活を送るために、遠い地域の人々とも交流をもちながら便利な道具を発明していたことに驚きました。SDGsの9「産業と技術革新の基盤をつくろう」に取り組んでいると思いました。

● 遠隔地から企画展の投票に参加

展示室にある QR コードを教室の大型テレビに映し出し、子どもたちはタブレットでその QR コードを読みとって企画展の目玉である「土偶総選挙」に参加しました。



タブレットで QR コードを読みとる生徒たち

生徒 C の感想



39体の土偶はそれぞれ個性的で、こんなにいろいろな種類があることに驚きました。私の学級の35人は、お気に入りの土偶が違っていました。きっと縄文人は、その違いを尊重していたのだらうと思います。

リモート学習の成果と課題

文部科学省の GIGA スクール構想を受けて、市内小中学校の児童・生徒一人ひとりに学習タブレットが支給されたことで、今回の取組にチャレンジしました。

そのなかで、ホンモノを目の前にすることができない場合でも、遠隔地からホンモノを映し出しながら問いを発信することで、子どもたちが追究可能な学習を行うことができたと考えられます。今後、郷土資料館や近代の産業とくらし発見館、遺跡や史跡に行くことが難しい場合でも、このようにホンモノを提供した学習が可能になると考えられます。

しかし、本当の感動や実感はホンモノを目の当たりにしたり触れたりしたときにこそ湧き上がるものだと思います。そう考えると、リモート学習に限界があることは否めません。

おわりに

双方向の学習を可能にするリモート学習の取組をご紹介しましたが、この経験は令和6年（2024）開館の（仮称）豊田市博物館でも生かされると考えます。リモート学習を来館前の事前学習として取り入れることで、きっと博物館の学習効果を高められるとともに、子どもたちの期待感も高まるでしょう。まるで、遠足前に子どもたちが抱く「わくわく・ドキドキ」のように。

（山岸 怜）

[寄稿] 76年前の工場疎開跡を探して

1. 旧西中金駅近く

豊田市の旧西中金駅近くに、棚田が広がる小さな谷間があります。令和3年(2021)5月、そこで3つの横穴が見つかりました(写真1・2、図)。

穴の大きさは人が立って歩けるほどで、高さと同幅が1.8m×1.7m、奥行きは約6mです。穴は崖の途中にあり、東向きに水平に掘られています。

入口が見えるのは南側のひとつだけです。残り2つの穴の入口は、土砂でふさがっているため外からは見えません。3つの穴は奥の方で縦につながり、長さが12.5mあります。カタカナの「ヨ」の字に似ています。昭和40～45年(1965～70)頃まで、3つの穴の中に入れたそうです。横穴の存在は、私にとっては「発見」でしたが、実態としては「再発見」と言えます。

2. 「再発見」のいきさつ

令和3年2月の訪問で穴を見つけられなかったため、5月29日に再訪しました。地主の大岩勇夫さんの了解と協力を得て、大岩さんご家族と鈴木勝己さんと私の5人で、横穴を探しました。除草後、年配者2人の記憶を頼りにイノシシの穴と間違えたりしながら探したところ、崖の途中に小さな竪穴を見つけました。穴はトロッコ道

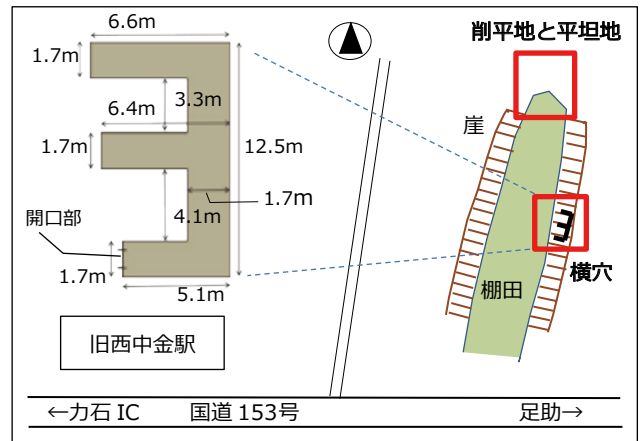


図 工場疎開跡の位置と横穴(概略図)

から約3～4mの高さに位置し、穴の深さが1m以上あります。

土砂を除けると横穴の入口が現れました。中に入ると、花崗岩のマサ化が進み、手で触るとボロボロと崩れます。天井や壁から落ちた石が、通路に10cmほど積もっています。穴の形はほぼ四角形ですが、天井はやや丸みのある逆Uの字に、手掘りで掘られています(写真2)。

その後は平坦な土地を探すため、谷奥の削平地のさらに奥を1人で歩きました。雑木をかき分けて歩測すると、東西8～12m×南北35mで、意外な広さがありました。

3. 最初の訪問

私は、『愛知製鋼50年史』(平成2年[1990])にある「西中金駅近くの山中に刈谷工場……を疎開することになった」の件を読んだ当時、疎開先は具体的にどこか、なぜ西中金駅近くのなか、興味と疑問をもちました。しかし土地勘がない私には探しようがありませんでした。余裕ができた3年前から、疎開先を探し始めました。

いろいろなご縁をたどり、令和3年2月3日、豊田市近代の産業とくらし発見館の小西恭子学芸員と2人で、昭和20年頃の話のを伺いに地元在住の鈴木さんを訪ねました。聞き取りで、以下のことが分かりました。

- ① 自宅の西にある畑に、2階建ての工事用小屋が作られた。1階東側には、機械3～4台が運び込まれ、ブンブン唸っていた。戦後、機械は撤去された(唸りはトランスの特徴音。後述の『愛知製鋼30年史』(昭和45年)に、トランス搬入の記述がある)。
- ② 三河線西中金駅から東に延びる土手(足助町追分に至る)から谷奥まで、谷の東側の崖を崩し水田を埋め立ててトロッコ道が作られた。当時、谷の西側に農道があった。崖に3つの横穴が掘られたが、現在は入口が埋没して所在不明。谷奥の削平地は今も残るが、水溜まりができる程度の大きさ。トロッコのレールは、戦後撤去された。
- ③ 自宅東の蚕室小屋を、工事用事務所として会社に貸していた。会社名は不明のままであったが、鈴木さんが今回、自宅で見つけた賃貸借契約書(昭和20年5月1日付)により、豊田製鋼であることが判明した(豊田市史資料調査会編『石野地区城見町鈴木



写真1 工場疎開跡
(北を望む、丸:横穴の開口部、四角:谷奥の削平地と平坦地、斜線部:旧トロッコ道)



写真2 横穴の内部
(写っているのは大岩敦昌さん)

勝己氏所蔵資料仮目録』No. 175)。

④ 夏、神社で起工式？後、舞台を使った演芸会を開催。

聞き取り後の現地調査では、横穴を見つけられませんでした。谷奥の削平地は約3m×3mと狭く、工事途中で終戦となったのか、設備を置ける広さではありません。

その後、城見町で2か所の地下壕が登録されていることが分かりました(『平成29年度特殊地下壕実態調査結果』国土交通省ホームページ)。豊田市役所に問合せをしましたが、「記録は町名までのため地番は分からない」とのことでした。1か所がここであるとすると、もう1か所とは、3つ穴の向いにある開口したイモ穴(野菜の貯蔵用)を地下壕と間違えたと思われます。

4. 愛知製鋼(旧豊田製鋼)

横穴と削平地が、豊田製鋼の工場疎開跡かどうかを検討するために、同社の歴史を振り返ります。

昭和15年(1940)、トヨタ自動車工業向けの鋼を作るために、「豊田製鋼」という鉄鋼製造会社が刈谷に設立されました。同社は、戦後の昭和20年11月に「愛知製鋼」へ改称し、現在に至っています。

同社は、自動車用鋼を作るために設立されたのですが、戦争が進むと軍需が中心に変わりました(表)。

『30年史』には、知多工場と刈谷工場の鋼生産(昭和19年)は、約2,000トン/月(軍需1,500トン/月、民需500トン/月)であり、民需の中には軍需がかなり含まれていたと記されています。軍需とは、熱田の名古屋陸軍造兵廠、豊川をはじめとする各地の海軍工場、軍需省への納入であり、鋼は主に兵器生産の材料に使われました。

表 会社の年表

	豊田製鋼	トヨタ自動車
豊田自動織機の社内に設立	昭和9年 製鋼部	昭和8年 自動車部
会社の分離・設立	昭和15年2月 豊田製鋼	昭和12年8月 トヨタ自動車工業
軍需会社に指定	昭和19年4月25日	昭和19年1月17日
工場疎開の命令	昭和20年6月10日	昭和20年5月16日
防諜のため工場呼称を変更	昭和20年5月 刈谷工場から 護国第51工場へ	昭和20年6月 拳母工場から 護国第20工場へ

わずか数行ですが、『30年史』に、工場疎開のことが具体的に書かれています。

「昭和20年6月10日に分散疎開指定を受け……名鉄西中金駅近くの山中に刈谷工場の2号電気炉、圧延工場を疎開することになった。……徴用工約30名により電気炉、圧延工場の基礎が掘られ、名鉄西中金駅から山中の工場までの道路を作り、刈谷工場から電気炉用トランスが運び込まれたが、間もなく終戦となり、工場疎開は計画のごく一部を実施しただけで中止となった。」

刈谷工場では、屑鉄を電気炉で溶かして鋼を作るので、原料(屑鉄、合金鉄、石灰など)の搬入および鋼製品を

配送する運搬手段が必要です。働く人の通勤の足の確保やエネルギー源である電気・石炭も重要です。圧延機を動かすには電気が必要で、電気炉は大量の電気を消費します。

5. 考察

城見町は、空襲を避けるのに有利な地形(空から見にくい丘陵の谷間)であるだけでなく、旧飯田街道沿いで道路が通じています。西中金駅に近いので、物資の運搬や人の通勤に便利で、電気の供給も可能です。

『トヨタ自動車20年史』(昭和33年)には、戦争末期、トラックを生産する同社拳母工場で、構内輸送用のトラックが不足し、払い下げの軍馬を使った馬車で代用した苦勞が記されています。

豊田製鋼刈谷工場の疎開でも、トラック利用は同様の困難が予想されるため、鉄道ルートを利用するつもりであったと思われます。想定ルートは、次の通りです。

豊田製鋼刈谷工場～(専用線)～刈谷駅(国鉄-名鉄)～(三河線)～西中金駅～(トロッコ)～工場疎開先

刈谷工場から当地に一番初めに搬入された機械であるトランスは、このルートで鈴木さん宅の西の工事用小屋に運ばれ、仮置きされたと推測しています。話が脱線しますが、専用線のレールは今も刈谷工場に残っています。

鈴木さんの証言、鈴木さん宅から発見された賃貸借契約書の確認、現地調査および考察から、3つの横穴と削平地は、豊田製鋼が刈谷工場を疎開するため、昭和20年に掘削した(または掘削し始めた)ものであり、削平地とその奥の平坦地は、工場疎開予定地であったと思われます。

6. 今後の課題

まだ分からないことがいくつかあります。

- ・3つの横穴の用途
何を設置する予定だったのか(トランスか)、なぜ高い位置なのか(湧水対策か)、他の疎開工場との比較
- ・工場レイアウト
削平地や平坦地で、電気炉と圧延機の配置が可能か、疎開工事の痕跡を見つけられるか
- ・工場疎開が地域に与えた影響
工場疎開が地域に与えた影響を、聞き取りなどにより多面的に掘り起こす(工事従事者の中に朝鮮半島出身者の家族がいたとの証言もある)

工場疎開の実態をさらに解明していく中で、この疎開跡を今後どうするのかを考え、広く議論していくことが、地主さんの意向とともに大切ではないかと思えます。

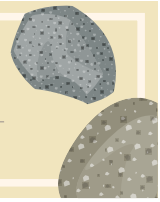
最後になりましたが、城見町在住の鈴木勝己氏および大岩勇夫氏とそのご家族、ならびに小西学芸員のご協力により、工場疎開跡を「再発見」(確認)することができました。ここに記して感謝申し上げます。

山田富久(名古屋市在住 愛知製鋼OB)



みんな^でつくる博物館！

～自然標本あつめるプロジェクト～



郷土資料館（博物館準備室）では、今年度から「自然標本あつめるプロジェクト」と題して、豊田市域の昆虫と岩石をテーマに市民の皆さんと一緒に、新博物館で展示する標本を収集する活動がスタートしました。このプロジェクトでは、参加メンバー自身が市域の様々なフィールドに足を運び、収集、標本化、整理といった作業を行いながら、令和6年（2024）の博物館開館での標本展示に向けて活動を進めています。今回は、岩石チーム、昆虫チームの活動の様子をご紹介します。

あつまれ！とよたの岩石～岩石チームの活動～

豊田市域は、その大部分が花崗岩を基盤岩^{かこつがん}としています。花崗岩は、マグマが地下深くでゆっくりと冷え固まってでき、古くから、建築資材や墓石等などによく利用されてきました。桜城址公園に残る桜城の石垣にも、花崗岩が使われています。

しかし、稲武地区には、亀甲岩とも呼ばれる玄武岩の分布も見られます。また、ひとくちに花崗岩と言っても、マグマの成分の違いや冷え固まる過程の違い、色や含まれる鉱物の大きさの違いなどによって、多様な姿を現します。猿投山に見られる菊石（球状花崗岩）も、花崗岩のバリエーションの一つです。

岩石チームでは、私たちの足元に存在している岩石を丁寧に収集し、豊田の岩石標本コレクションと基盤岩マップの完成を目指し活動しています。年齢も経験も様々な総勢16名のメンバーで今後も完成に向け、資料の収集や整理作業を進めていきます。



伊奈川花崗岩 近岡町地内採集

8,200万年ほど前に生成されました。花崗岩の中に含まれる石英や長石などの鉱物の結晶が大きいことが一つの特徴です。



武節花崗岩 押山町地内採集

7,500万年ほど前に生成されました。伊奈川花崗岩とは対照的に、含まれる鉱物の結晶が小さいです。青味がかかった色味をしています。



伊奈川花崗岩 白川町地内採集

上の写真と同じ伊奈川花崗岩に分類されます。しかし、冷え固まるときの環境の違いにより、黒色の鉱物がほとんどなく、石英と長石が大部分を占めています。



安山岩 大野瀬町地内採集

亀甲岩と同時期に長野県根羽村のあたりを中心とした火山活動によって生成されました。岩石を形づくる鉱物組成から、玄武岩より安山岩寄りの石になります。

あつまれ！とよたの昆虫～昆虫チームの活動～

豊田市域には8400種類を超える昆虫が確認されています。昆虫チームでは、年齢も経験も様々な総勢17名のメンバーが身近な存在である昆虫を通して豊田市の自然の面白さを伝えていけるように、地域別標本コレクションの完成を目指して、採集や標本展示に向けた整理作業を進めています。



定例活動日の様子

ゆるく楽しくをモットーに、毎回サークル活動のような雰囲気です。活動を進めています（会話は恐ろしくマニアックですが…）。様々な昆虫が集まるため、通りかかった子どもたちが活動をのぞきにくることもしばしば。



採集活動中の様子

豊田昆虫友の会にサポートいただき、定期的な採集活動も行っています。はじめての方でも、採集から標本化までを一緒に体験しながら活動を進めているので、気付けば標本作成もマスターしています。

こんなのいました！プロジェクトであつまったとよたの昆虫

活動では珍しい種類から変わった種類まで様々な昆虫が集まっています。まだまだ活動の途中ですが、現在集まっている昆虫の一部をご紹介します。



ミカワオサムシ

森林に生息するコウチュウの仲間です。採集場所によって緑や赤など色彩変異があります。



ミヤマクワガタ

雑木林などに生息するクワガタムシの仲間です。プロジェクトではクワガタムシの仲間もたくさん集まっています。



オオムラサキ

メタリックブルーの美しい大型の蝶です。日本の国蝶に指定されています。



ツマグロヒョウモン

近年、分布を広げているタテハチョウの仲間です。街中でよく見かけるチョウの一つです。



ニイニイゼミ

街中でも見かける小型のセミです。一見地味ですが、羽を広げると美しい模様をしています。



とよたの新しい博物館 はくぶつ chan 配信中

令和6年(2024)開館予定のとよたの新しい博物館。博物館の活動や展示予定のお宝紹介の番組を制作しました。ケーブルテレビひまわりネットワークやYouTubeでご覧になれます。以下に内容の一部を紹介します。

献上塩鮎とは?

江戸時代に挙母藩から将軍家へ献上された矢作川の鮎です。番組では鮎の塩漬けを再現しました。

第1回

將軍様も食べた!
「献上塩鮎」を食べてみた!



とよたの OTAKARA
「重要文化財 紙本著色織田信長像」

みんな博! ~みんなの新しい博物館~
「第1話 縄文人が現れた!」



はくぶつ chan 第1回
<https://youtu.be/1a60QcDHSmk>

ほか

第2回

縄文人も食べた?!
「ドングリクッキー」を食べてみた!



とよたの OTAKARA
「長篠合戦図屏風」

みんな博! ~みんなの新しい博物館~
「第2話 落武者が現れた!」



はくぶつ chan 第2回
<https://youtu.be/89QOXEiG63k>

ほか

【第2回より】 ドングリクッキーレシピ



材料(約20個分)

ドングリ粉	50g
(あく抜き後)	
はちみつ	10g
小麦粉	10g
ラード(豚)	10g
水	5g



1. ドングリの外殻をむいて中身を取り出す。フードプロセッサーでドングリを粉砕し、細かくする。さらし布などで包み、水さらし(2~3日流水につける)であくを抜く。
2. 材料をボウルに入れて、よくこねる。
3. 適当な大きさに丸めてから、平らにする。厚いと火が通りにくくなるので注意。丸めにくいときはスプーンで、フライパンに直接のせて成型する。
4. フライパンで弱火で焼く。ときどきフライ返しでひっくりかえして、十分に焼く。こげつきそうなフライパンを使用するときは、油を引いて焼く。石窯やオーブンで焼き具合を見ながら焼いてもよい。

■豊田市郷土資料館利用案内■

開館時間 午前9時~午後5時
 休館日 毎週月曜日(祝祭日は開館)、年末年始
 入館料 無料(特別展開催中は有料)
 交通案内 名鉄「梅坪駅」より南へ 徒歩10分
 名鉄「豊田市駅」より北へ 徒歩15分
 愛知環状鉄道「新豊田駅」より 徒歩15分
 とよたおいでんバス「陣中町一丁目」より西へ 徒歩5分
 駐車場 約20台

●豊田市郷土資料館だより No.112

令和3年12月6日発行
 編集・発行 豊田市郷土資料館
 〒471-0079 豊田市陣中町1-21-2
 TEL.0565-32-6561 FAX.0565-34-0095
 E-mail● rekihaku@city.toyota.aichi.jp
 URL● <http://www.toyota-rekihaku.com>
 FB● <https://www.facebook.com/toyotarekihaku>

※豊田市郷土資料館だよりは、HPでもご覧いただけます。